

鮑又思書日載

五十三

大正五年六月下浣起筆

特別
14
1919
302





176577

進交魚巻日記五十三

大正五年六月廿二日起事



○今秋同者徳協会ニ志のつく保陰協会の
 祝宴を催す徳川徳義のふるまひを
 福成と本年華甲ニ丁リ帝四回者徳の長
 立親三十年初日若古帝大附属園者徳
 長立親二十五日におもひあはれ
 あり徳義武場に於て演説と演説
 記念名を贈るに徳のふるまひ
 員七十名にふるまひ集ふあはれ
 徳義の補助にふるまひ三報の杯とふるまひ

るに流儀の物也余は高上二坊の流儀をぬ
す大要の左の如し

今又と年祝いとまふおめむまいふかある、何の
御祝詞を申上へんかあるか、とまふと自分より
年祝いのまふに出ることといつて端詰する、
自分より田中へまふ物迄年祝いのまふ、
七年の結りひあるか、どうも七人より七年と
元とまふぬ、困る、何んぞ、年祝いのまふ
まふく出ると御金の元を減する、おまふ、
一とおまふ、さうい、いつかや七一の橋の代り
大まのまふ、に流儀は、おまふ、まふ、
歴々、まふ、とまふ、本人のまふ、同意、

非流儀の流中、とまふ、い、い、とまふ、
自分より、おまふ、い、い、ド、心、
まふ、まふ、おまふ、まふ、自分より、
い、い、い、い、い、い、い、い、
か、い、い、い、い、い、い、い、
まふ、まふ、まふ、まふ、まふ、
い、い、い、い、い、い、い、
と、い、い、い、い、い、い、
く、い、い、い、い、い、い、
か、い、い、い、い、い、い、
ま、い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、
い、い、い、い、い、い、

成化にかじし方七^六大^六方^六あえ、感化の海、
くさくさこのころ自合の一例にむつても略々視つる
ふむあつあつと思ふ、徳川徳義にあえのりらん
視察の心を思ひまはんにのち敬も、意味あ
る事し、自分、満幅の目視ををまするものも
清くは保たせむ

言を今より毎日のつらさうにのちをいふに
し、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
九のころと地球を中におもひ、^{徳川}徳義の
今この徳川^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
この日と日と、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
又、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、

こころあつ、^{徳川}徳義の天子、^{徳川}徳義の内助、
徳川^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
このころ、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
改定を思ふ、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
めと、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
あ、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
こと、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
ま、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
言、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
回、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、
と、^{徳川}徳義の事、^{徳川}徳義の事、

の上よりちるるを教わらんとすや職もあつて
其の徳をあるのんたるありのよむじこ一方の
今も縁の下に著るべし一生世の福なり
或るをいける不幸不遇なる境遇を較べ
巴里子と一般であるらんる期をす
國母陛下の乾徳を祝し中する自ら
社名よりあか役もと代するあまの
賢念の投合したるも其の
く減らおもしりいより思とそ
らんる母の四母陛下の徳を
とれに社名よりあか役の洪徳を
するをあらは物快に感する言する

のゆきを志す影もとの他の彼も
しりて年ぬら松を散るる
とも志す影もとの
のすう方なき一層意味の深きを
の世に
ふ起つあまの人の傑もの
は統攝する
○父印中々々代神皇志願の
さるる
第一と昇す習のあはれ姉妹を
漸く三弦を昇す四無くして大要
内なるは福のんやうに珠し余の

但し研精會と梅寛の居る先師に

●三味線四郎治藝名の由来

實は早稲田の市島謙吉氏の令息
三味線の銘と坪内逍遙博士の撰

来る廿八、九の兩日有樂座に備さる、長門
研精會の「勸進帳」に三味線取つて三枚は
を初むる吉住四郎治、初めての番附名まで
四郎治では親しみが無いが實は早稲田大學
の元老市島謙吉氏の令息君(二六)の假の
名である、君君が吉住六郎の門に入つて
三味線を稽古し始めたのは二年許りの事だ
初めて

▼フとした事からの戯れ
であつたのが其天才的▲

妙筆師の六四郎を驚かして遂にこれが
本物になつた、一度公會の席へ出ようとし
たのを嚴格な市島氏は藝事は娛みにこそ
すれ舞臺に出るなどは以ての外、事と容易
に許されなかつたもの、市島氏も君君の才
分を是認して「三味線はい、のを持たなく
てはならぬ」三百五十金を投じて支那か
らわざく香木を取寄せて作らした見事の
のである

三味線 昂貴喜ぶまい事か
▼何がなして舞臺で
心懸けて居る三京都から▲
上京した湯淺半月氏が「出給へく、殿君
の方は僕が引受けたよ」と大に後援振を示
したので君君力を得て折柄の研精會に
出勤する事となつたが名が無くてはなら
ぬと師匠に相談して付けて貰つたのが吉住
の家、粗末にはならぬ名の四郎治である、
愈舞臺と決つた時折角立派な三味線が出
来て初舞臺に用ゐるものだから銘がなくて
は不可ぬと其銘を之れも半月氏から坪内逍
遙博士に頼むと博士も「知人令息が目出度
い藝術の前途なれば」と快諾されたので
藝名はよし銘は博士の賜物なり、愈初夏
の藝壇にやさしき一花と咲出る事となつた

あつたのひびきを響かするやうな天皇の御行動といふ

終りにあつたので御事をおおしとて、
高きも程々のお終らねつたにあらざらん
皆聖とて、御事の中へ、一は、とて、
仰の流とて、御事の中へ、一は、とて、
と凡名の中へ、とて、一は、とて、
る、凡名の中へ、とて、一は、とて、
位、とて、とて、一は、とて、
凡名の中へ、とて、一は、とて、
の精進、とて、一は、とて、
とて、一は、とて、
とて、一は、とて、
とて、一は、とて、

夏浦島のお祝解りり大隈音お切りり男舟壯
時鏡言衣(島)に改草一もいんなるまのいし
と衣物よりん中し遊のりりりりりりりりり
併も衣物よりん中し遊のりりりりりりりりり
き能いせるふふ遊のりりりりりりりりりり
あり前島のりりりりりりりりりりりりりりり
式をりりりりりりりりりりりりりりりりりり

(大正五年七月可)

出来衣の葉のめめいりりりりりりりりりりり
を合つりりりりりりりりりりりりりりりりり
の葉集りりりりりりりりりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
弟田以上のりりりりりりりりりりりりりりり

幕集りりりりりりりりりりりりりりりりりり
文部三千田の費由をりりりりりりりりりりり
身係を心んしりりりりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
此の稀りりりりりりりりりりりりりりりりり
味ある物係りりりりりりりりりりりりりりり
下

かた人総代りりりりりりりりりりりりりりりり
その中りりりりりりりりりりりりりりりりり
名りりりりりりりりりりりりりりりりりりり
とち代りりりりりりりりりりりりりりりりり

柳信實隆壽式ありと降きお荒干の制約
 ありあるおと早稲の中たるを、字附をい
 云へしと柳信の由因に石道の将をへり
 路人を渡さるの必事安んばあはらる
 の新設と此の行をうに充つこととすし
 と余もも提議しせらるる由に決す
 此建設に就き海原之も加らるし努力力
 一終始方を一平に執り信の志地人を
 煩すま一さうし海原の島志録せよ
 を得る也

河じといえ第局く池河を、都的制法す、
 え氣の十年前と云うるも、唯此お行の
 く心えさく思ひんをり
 〇つ同者然く、あり湯使く、せんとそら比京
 都の住居を深く湯使く、南宮といふ事あるも
 び自分もそり合ひて、雨合し、此人を彫刻に
 代り技巧、一行の物をとるし、人をいひ、此
 漢鏡を分折し、同じ、ものを世ること、な、苦心し、終に
 成り、つら、ある、た、多、事、終の、際、も、二、面、の、操
 造、洋、鏡、を、得、た、し、た、の、も、を、な、味、録、も、も、ね
 刻、體、制、と、う、え、な、も、東、東、抄、(と)と、思、ひ、ぬ、不
 とい、く、出、来、て、な、る、ぬ、次、抄、を、古、く、柳、鏡、を

ありて獲たるるもの七のころいふいと日暮ののり
とせう出でるる。こゝろを海印とせうする意味は
るる利巧の人とせふ。いとせうとせうとて
り。自分からしき名のあるに。開るる地を
り。母屋をあらう。いとせうとせうとせうと
り。いとせうとせうとせうとせうとせうと
とせうとせうとせうとせうとせうとせうと
傳をせうとせうとせうとせうとせうと
ホックとせうとせうとせうとせうとせうと
把つて。いとせうとせうとせうとせうとせうと
を打つて。いとせうとせうとせうとせうとせうと
偏り記憶

海くううとせうとせうとせうとせうと
いあるる。いとせうとせうとせうとせうと
り。いとせうとせうとせうとせうとせうと
す。いとせうとせうとせうとせうとせうと
お。いとせうとせうとせうとせうとせうと
活。いとせうとせうとせうとせうとせうと
武。いとせうとせうとせうとせうとせうと
り。いとせうとせうとせうとせうとせうと
後。いとせうとせうとせうとせうとせうと
り。いとせうとせうとせうとせうとせうと
満。いとせうとせうとせうとせうとせうと
と。いとせうとせうとせうとせうとせうと

く諸天人の侍るに童子と称し侍ることを志す
て其性悲論と達意舎釋らるるが物也
謹考するに在田をとおすは閻魔のつらさを
淡ちくくしるるにうらみの元氣を来して文字年
のあつるを五等七層あしき中唯目らりてく
の迷懐は自分かききるに箇故に思ひあきくらぬ
そよ、自分のことき里うらつらと物も歎らるる
が、悲しく前身と世来まのことも美りあひ
あつたにおもひまの又自分のさうの境も人のあ
るを九朝とし物もなまを何るに没れん
随分地くうゆる氣うつすもこのんも前身に
あつる善隣といひあつた、そのるる報におわ

白くと箇故に因果を報の記をあましむ
く、魅をさるるを例の真面目、神子い淳
くくして珍う出さるるに、主客十二分の
神を考して十の以家とゆふ、(七月廿の前
知つるをあるる)
○功上春平雲林木米ののち、(善書と心す)
十部書、(善書) 善書に、木米の遺印六顆を
按せり、一巻を高くし、示すものあら、(善書)
涼燈、湯籠と載るる、(善書) 善書に、
○遺印、(善書) 善書に、
○善書、(善書) 善書に、
○善書、(善書) 善書に、

改つて題する(細き) 聖物を携り出るとありしころより
悔い揚げてある(其の) 聖物の(其の) 木米の印
契入り容易に得(の) 手本を印譜と見れば
業中(今) 印譜中(此) 一告(謝) する(其の) 歎
ふ(謝) する(其の) 歎(即ち) 嫌(い) 入(る) 事(の) 大(正)
五年七月初五也

○余の家は三不思儀あり十年在りしころ破屋
と傳ふるに僅る三十日(此) の家賃を拂ふことと
為(る) 難(い) こと(一) 者(守) ち(應) 接(す) ち(後) 言(ふ) 事(あり) ぬ
一(守) ち(應) 接(す) ち(後) 言(ふ) 事(あり) ぬ(此) 扇(も) 此(の) 扇(も)
き家也(而) して(此) 大(官) 人(自) 動(車) と(認) り(て) 入(る) 事
も(有) り(と) 一(守) ち(應) 接(す) ち(後) 言(ふ) 事(あり) ぬ(其) 教(育) 家(に) あり(ぬ)

いふ後(子) の(一) 扇(に) 結(び) 断(つ) ち(る) こと(二) 不(思) 儀(も)
益(大) の(地) あり(夏) 的(性) 熱(さ) 生(か) へ(起) り(嫌) を(病)
つ(る) 街(路) 行(人) 足(を) 踏(め) ち(身) と(做) ぐ(こと) 三
不思儀(も) 扇(の) ぬ(き) ち(扇) の(土) 落(ち) 者(西) 骨
草(元) 填(す) こと(も) 不(思) 儀(の) 一(者) あり(と) 歎(か)
三十年(借) 家(生) 活(を) つ(け) け(り) 今(も) 女(境) へ
過(す) こと(も) 不(思) 儀(の) 一(者) あり(と) 歎(か)
こと(も) 不(思) 儀(の) 一(者) あり(と) 歎(か)

早稲田(伊) 中(邦) の(田) 入(地) の(三) 扇(の) 草(元) を(の)
て(研) 究(會) (に) 携(り) 出(す) こと(も) 不(思) 儀(の) 一(者) あり(と) 歎(か)
手(と) 携(り) 出(す) こと(も) 不(思) 儀(の) 一(者) あり(と) 歎(か)
す(る) 一(人) (の) 田(入) 地(の) あり(と) 歎(か)

第二回 仙臺伊達家 入札落札表

Main table containing auction items, names, and prices. Columns include item names (e.g., 名物唐物, 信子), prices (e.g., 金五萬七千圓), and names (e.g., 山田, 川村).

Table with columns for '元札' (original items) and '落札金額' (bid amount), listing items like 京田, 川村, 山田 and their respective values.

備考 表中記載ノ高直ハ二百圓以上トシ其下省略ス (非賣品) 大正五年七月五日 東京銀座 尚山堂印行

東京四谷見附前 伊達家入札落札表

Vertical scale on the left edge of the page, numbered 1 through 10.

七七日と一日とあるは、物屋の書に印譜に比し
 字の布字を因し、うらむるや、さきと書くは、
 同じ例、一方は楷體、古きと書くは、
 楷體也、一方は、加布、雌黄を施し、
 俗も、同じく、雌黄を施し、
 字し、さきと書くは、
 給ふ、さきと書くは、
 し、さきと書くは、
 印譜と、
 と、
 り、
 り、

山青残月落松石古村寒橋常人未過滿耳
 水冊

其字は甚早之、有法課印士、
 百詩、
 百顆

早起、
 流、
 命、

朝、
 明、

天子、
 瑞、

紅霞抹青嶂
多語成心波也
余鳥每晨起
有林性

果、難日出未還
難亦峰——莫乃小
愁星乃小
世貴口中密煮茶
心思深終古無人識
玉泉嘗苦心

男子雲堂裡不安
一點蒼何况重

際亦須口
文嬉到第九
不惟君磨刀

韶風猶料峭
殘雪推山城
今晚賣花去
春生滿市聲

霜月映寒竹
空好
大寒家山此
天影合入
誰看

平人初定寒
當時秋
東起能風雪
歌遠處
折舞乾

回雲掩城
布竹見
法多聲
報能
衣雪
氣點
打是
鳴

拜宮到
安平
九子
九詩
運刀
天
就一
出
了
文
嬉

驩然引
太白
一百
理
成
寒
詩
与
祿
昂
狂

點
魚
天
涯

稜
系
夕
氣
葉
之
聲
海
外
死
然
遠
道

信
人
風
捲
寒
沙
名
來
雪
前

山
夕
地
白
如
銀

山
夕
地
白
如
銀

山
夕
地
白
如
銀

の流る難きふあきとらうの橋大空に因家のお
 高きとる馬路多うの心もそ七世調のや魂を若き
 なるあめのほ由作を仲傳の長唄と心入ししを
 思ひとらうし又あめあめもさきを身う後年
 ねめめの内は世の三味線を思ひくくもの出るべし
 けりし世の人の世を思ひくくもの出るべし
 けりし世の人の世を思ひくくもの出るべし
 の後この世を思ひくくもの出るべし
 術のつらさと歌りての世を思ひくくもの出るべし
 黒人の世を思ひくくもの出るべし
 山見の世を思ひくくもの出るべし
 我と世を思ひくくもの出るべし
 の世を思ひくくもの出るべし

有樂座(數寄屋橋内)に於て開會 (大正五年七月十二日、十三日 兩日午後六時半開演)

第百五十二回例會演奏番組

賞題	長唄	三味線	雜子
第一 猿			
舞			
吉住小三藏	杵屋長三郎	笛	住田又作
吉住小一郎	杵屋六一郎	小鼓	望月仙右衛門
吉住小次郎	杵屋三太郎	同	望月長十郎
吉住小登七	杵屋三太郎	大鼓	望月長四郎

○大江十

林也
 形式楽舞、鈕こ大空寺縁起中、集
 織作の文を刻す、誠心刻者の名をんも何人
 う未久くす、十是物味の人世の印を

此の通り雅きふあしとらうの橋大なる田舎の如
 きものも馬路多うの心もそと世調のやれを者さし
 たるあゆみのほり雅き舟の長唄と心入ししもの
 思ひとらうし又あゆみのあつさきを身う後年
 ゆめの内は世の三味線を流しつもの出づべし
 かなり流しつもの思ひとらうの思ひとらう
 の後この
 術のり
 黒人の
 山見
 歌と
 かなり

○大江十足の遺印を題と稱得、木印材格古
 材恐く正合院修築の際得た木片をそとあつさ
 きもの形も式も衆知、鈕は大江寺縁起中集巻
 紙作しの文を刻す、紙心刻ある名もあつさ何人
 の末久くす、十足物語の人此の印を指

古塚足名一録



古山宗次西辰七月十三
於長陵松蔭を家造
中印河内幸山未就嘆
書跡法し新書
陸奥家

○大槻め雪の詠は昔一丁谷神成術るに都宮を
由原(通名本由)と云ふ在る危うあつた生まれ奉り
めりゆりてあつるの出来ゆきと区細な事なれは昔
きあつてしききとゆきとゆきと米鹽の二袋ぬ
浦のくもろてまねあつた江戶のあつた又浦の
浦守ををを四の浦守と名にわたりぬるゆき
がやうしき大入程のあつたゆきと本由の
目々の程を果あつた陸奥のあつたゆきと海
とさうとさう(ゆき)あつたゆきと後日
ゆきとゆき(ゆき)ゆきとゆきとゆきと本由の
ゆきとゆき(ゆき)ゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆきとゆき(ゆき)ゆきとゆきとゆきとゆきと
ゆきとゆき(ゆき)ゆきとゆきとゆきとゆきと

いたつた北のちなるを、職の骨柄字中、注候の
 凡段とてのひんと、札一件と大枝廿四又入心三
 十二文位の本由、三三つさうむらる、本由のええと
 骨に此に載るといふと、と方々、さうえを、
 二あるのものを、言して行く、程一件、大枝候一夜
 即ち九十六文、いあつたを、
 〇西洋又字、さうさう、描字を流し、形式を
 脱して、新く、さうさう、生きて、このころ
 何ゆゑ、と、此候の、
 えさ、の、二、符、を、捨、り、誤、り、
 内、名、を、あ、り、る、も、お、ち、さ、う、さ、う、二、つ、三、つ、と
 ち、あ、り、お、し、す

犬 二、その、事、の、建、
「お、あ、中、」

小は、
 ミ、
 か、
 片、
 舌、
 が、
 字、
 回、
 想、

しつぬい出すと甘い湯のから乳けが滾りと
出てくる。咽喉、流し込め、胸を叩く。何とも
言はずお甘い。喉の下からまじり乳首、
附のぬえが鼻面が割り込んじまら、奪ん
まういと、まき毛の生えは胸を突ける大駝
おやつとえぶが、別取奪んてうい、平家丸

上やうに控ける塔後居るのエリユーミ子リーシヨ
をウーに流る流るに新く

鏡の海を測り海に六を掃く切ると危ねか
あるはまの地とむねむある、斜う切ると甚死か
ふ爛の奥に星を埋めし、陽ううまき物を後星

く地る... 上は細い線の... 一と引いて
重なるを走つた、二を引いて上から落るを来た
凡を掃いて花雪のゆき地は広く廻轉し乳
まぬる穂先を逆しまう、返して亭座の
真中を貫けとはかう掛け上げた、かくして
塔を掃る、塔を掃る連るうり、石也の地
の此方から又後す向を左から右に掃る
埋めし、入るる、石の塔の面が出来、星
を合ふ星は海... 全を掃るぬ高き塔は
臺を掃る、掃るを掃る、廻廊を掃る、曲欄を
掃る、山塔方柱の数を掃る、掃る、掃る、
掃る、掃る、是れ、用ひ切らん、掃る

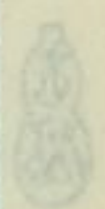
上を継きり戻りつゝ維揚る志を走る鱖の傍
●ハ一丘一劃を乱すこととて一劃のこころ
一劃のこころを洗せしむる動のこころを
明くは動のこころを洗せしむる動のこころを
名がええぬ 漸石 重く美人子

○小田路桂香とて洛川法國越鼓の及ぬ一枚を
将も 断同改とて一丘一劃とて一丘一劃とて
ある其の味ありて一丘一劃とて一丘一劃とて
ある人の傳を請ふ資料に元つてきへき歌
嘗其孺皮俱未訪余於有斐又市巾法笑抵
夜池生燭前揮毫為余作市巾山圖其神

氣淵逸言若無人而每一木一石成孺皮從其方
嗟賞之其聲隨畫大小亦有低昂人皆笑之
而二生不覺也今北帖之妙非特前市巾山
之比也顧孺皮方觀此時其嗟賞不知更
以之作如何趣耳也 札記 臨懷念也
方其其谷之山阿々大雅の畫とて動のこころを
○江芸閑の事相の比古めは動のこころを
故る暇もなきし 決然其 揚守印の事
七のしる望物を 獲るる 路もあやま
又お人うちまきりもあやま

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二



覽字

十二
卷

